

国際武道大学  
2021年度一般選抜  
小論文

次の文章は、島沢優子さんがラグビー・イングランド代表ヘッドコーチのエディー・ジョーンズ氏へのインタビューをもとにして書いたものです。次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

現在イングランド代表を率いるエディー・ジョーンズは、日本の部活を最もよく知る外国人コーチかもしれない。元高校教師で、教育やスポーツ育成に関して一家言もつ。「日本の部活問題について聞きたい」と取材を申し込んだら、快諾してくれた。

1996年に東海大学のコーチを務めたのを機に来日。連続日本一に導いたサントリーの監督時代、実は『スクール・ウォーズ』のエピソード全編をおよそ3カ月かけ毎日のように観続けた。従順で真面目だが、失敗を恐がり創造性に欠ける学生たちに違和感を抱いていた。なぜそうなるのだろうか。高校部活の現実を知るためだった。

熱血教師が高校ラグビー部を全国優勝に導く物語。エディーは、80年代に大ヒットしたこの学園ドラマから日本のラグビー文化を理解しようと試みたのだ。

「感想……ジャスト・スチューピッド (Just stupid=バカバカしい)。戦時中とかではない。ほんの二十数年前に作られたドラマだということが信じられなかった」

ずっと頭を抱えたまま、見続けた。ドラマでは、顧問が多くの場面で部員たちを殴っていた。豪州で生まれ育ったエディーにとって、まるで理解できなかった。

「スポーツは、何より楽しまなくてははいけない。10代まではその気持ちだけ育てればよいのです。でも、日本はスポーツを部活として学校教育に持ち込むことで、子どもたちに規律を守らせてきた。スポーツを(生活指導の)手段に使った部分が、ほかの国と違うのです」

日本代表の選手たちに中学、高校でどんな指導を受けてきたのかを尋ねながら、学校や合宿地を訪れて自分の目でも実際に見て回った。ジュニアチームから中学校、高校のラグビー部まで、部活の現状をリサーチしてきた。

「とにかくどこの学校も練習が長い。一度に3時間やるのが常だった。しかも、意味のない練習が非常に多かった」

最も驚いたのは、ある強豪私立高校の夏合宿だった。午前、午後3時間ずつ練習。顧問は午後の練習後、突然フィットネステストをやらせた。3時間みっちり走らせた後、瞬発力や持久力を計測するのだ。選手は倒れそうになりながらテストに臨むので、当然出てくる数値は悪い。

だが、顧問は部員を怒鳴り散らした。

「ほらみろ！ できてない。走れないじゃないか！」

エディーには、3時間もの練習のラストに体力テストをやる意味がわからなかった。単に選手を叱る材料にしているだけに見えた。

「それで果たしてラグビーがうまくなるのか？ 私が部員ならそんな疑問を抱くだろうから、監督とケンカになってしまいラグビーを辞めてしまったでしょう。ですが、現実には、そういった指導をトップクラスの強豪校が行っていた」

エディーは眉間にしわを寄せながら「特に子どもたちの育て方を変えなくてははいけない」と説いた。「トップは勝つことにこだわるのは当たり前だろう。でも、若年層は違う。中学生や高校生を育てる指導者が勝利にこだわると、厳しさの意味が違うものになる。単に子どもたちを委縮させる“恐怖を与える、指導になるでしょう。そうすると、子どもたちは自分でラグビーをクリエイトしなくなる」

一日5部練習など、ハードな練習が取りざたされることの多かったエディー・ジャパン。ジャパンの

「厳しさ」は意味が違うのだ。

「他国の選手は各所属クラブで代表に見合った体をつくってから合流するが、日本は代表チームでそれをやらなくてははいけなかった」

体作りとは別に、もう一つの仕事は「自ら考える・取り組む」という主体性の強化だったという。

「他国の選手は、もともとそんなふうで育てられている。ところが、日本には（主体性という観点）足らなかった。それは彼らが中高生の頃から、スポーツをなぜやるのかを大人が理解させていないからだと思う。日本は部活動によってスポーツが規律を守らせるための道具になり、強靱な精神を作るのだという誤った考えを子どもたちに与えてしまったのではないか」

エディーは、スポーツは楽しいリクリエーション<sup>(注1)</sup>だという。英語の「recreation」は「創造する」という意味を持つ。

「スポーツの意味をはき違えたままでは、スポーツをクリエイトできないだろう。日本人はなんだか小学生くらいから、スポーツを仕事のようにとらえて「ボクはやらなければいけない」と辛そうにやっているように見える。すごく悲しいことだ。オーストラリアの子どもは、大人に『絶対勝て』だなんて言われたことがないと思う」

エディーによると、豪州の中高生は、学校の部活と外部のスポーツクラブで半々に分かれるという。組織が二分化されていることもあり、どの競技にもどの年齢のカテゴリーにも、全国大会はない。それゆえ、日本の部活がハードになりすぎる要因に全国大会の存在を挙げる。

「高校ラグビーにも花園がある。素晴らしい大会ではあるが、そこでよいラグビー選手が育つかは疑問だ。少年サッカーも同じ悩みを抱えていると聞いている。日本の全国大会はトーナメント方式だから一度負けたら終わりでしょう？ 若年層の強化はリーグ戦がベターだ」

もうひとつ。子どもたちが年中スポーツ部活をやっているのもよくないという。イングランドの高校生もラグビーをやるが、年間10～20試合。一年のうち3ヵ月しかやらない。それ以外は、3ヵ月は陸上競技をし、3ヵ月はクリケット。夏は水泳、冬にサッカーをする子もいる。欧州は米国などと同様、子どものスポーツがシーズンナブルなのだ。

「中高生が年中ラグビーをしているのは日本だけなんだよ」

エディーが語った二つのメッセージが印象に残る。

「何より部活は楽しまなくてははいけない」

「スポーツでも何でも、やらされるのではなく、自分でやるのが大事だ」

生徒が楽しめる部活。生徒が主体的に取り組む部活。この二つこそ、部活の理想的なイメージだろう。

島沢優子 (2017) 「部活があぶない」(講談社現代新書)

出題者注 (注1) リクリエーション：レクリエーションに同じ

問1 下線部「スポーツの意味をはき違えたままでは、スポーツをクリエイトできないだろう」とありますが、エディーさんは「スポーツの意味」をどのようにとらえていますか。また、日本ではどのようにとらえられていますか。それぞれ、簡潔に答えなさい。

問2 エディーさんの考える部活のあるべき姿を50字程度にまとめたうえで、それに対するあなたの意見を述べなさい。(合わせて400字以内)